

特集「動脈硬化症の早期発見と治療」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
内分泌・代謝内科学

中 村 直 登

医療の発展、普及に従って、平均寿命と健康寿命が毎年長くなっているが、けっしてその間がなくなることはなく、病悩期間が存在する。その原因の大きな割合が動脈硬化症に起因するものであり、その予防と対策が重要であることは理解されていたが、近年の薬物療法の進歩によって、さらなる改善が期待される今日、動脈硬化症をいかにして早期に発見し、どの段階でどのように治療すべきかは、各学会でガイドラインがあるというものの、それで充分というものではない。今回の特集では学内の循環器内科、神経内科、内分泌糖尿病内科から、各々の立場より先進的な内容の論文を記述していただいた。いずれも、今後の臨床に参考になる内容であり、かつ今後の発展に期待を持たせる内容であり、ぜひ熟読していただきたいと熱望する。

もちろん、動脈硬化性疾患はこの3科だけで取り扱っているものではなく、臨床科ならばす

べての科で関連がある問題である。現在は臓器別に教育、臨床が区分されており、動脈硬化症のような疾患は教育、臨床のいずれにおいても重複、または空白化がおりやすい分野であり、病院内だけでなく、院外のかかりつけ医も含めて調和のとれた臨床、教育が必須である。特に臨床研究が重要であるこの分野では、大学付属病院のみでは説得力のある結果を出すのはむずかしく、開業医院をも含めた関係医療機関との連携が最も重要な要素となる。これを円滑に機能させるためには、現在のシステムのままでは難しく、多くの善意の先生方に無償の重労働を強いることになっている。研究とは本来自発的なものであり、無償であるのは当然であるという原則論ばかりでは、ただでさえ疲弊した医療機関にモチベーションを惹起するのは不可能であり、抜本的な制度改革が必要であると痛感する。疲弊しているのは医療機関だけではなく、この国の制度そのものかもしれない。